

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	ゆにこーんハート（放課後等デイサービス）		
○保護者評価実施期間	2026年2月5日		2026年2月14日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	19名	(回答者数) 11名
○従業者評価実施期間	2026年2月5日		2026年2月14日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	4名	(回答者数) 4名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年3月27日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	<p>ことは音楽療法士による音楽療法の専門家が、児童の現在の心身の状況に合わせ「言葉の習得」と「発達支援」に直結した音楽プログラムを提供できる点が最大の強みである。</p> <p>・個別療育：視覚的・聴覚的な過敏さや、集団への不安が強い児童に対し、音楽を用いた安心感のある環境下で「できた」という成功体験を積み重ねる</p> <p>・少人数療育：音楽のリズムに合わせて、他社との同調性や順番を待つといった社会的なルールを、無理なく身体感覚として身に着ける。</p>	<p>・定期的な支援会議により利用児の状況を共有する。</p> <p>・家庭・学校との連携強化、事業所内で見られた言葉や情緒の変化を、家庭や学校生活でも汎用できるよう、より具体的な助言やフィードバックを共有する機会を増やす。</p>	<p>療育プログラムの質の向上と多角化</p> <p>・音楽×生活動作のパッケージ化：「ことば」だけでなく、箸替えや片付けなどの生活動作をリズムに乗せて定着させる「オリジナル・ソング」の活用を広げ、日常の自立支援をより強化している。</p> <p>・児童の自己主導性の尊重：「やりたい」を引き出す連曲と構成；指導者が曲を決めるだけでなく、児童が自ら楽器を運んだり、即興でリズムを作ったりする時間を増やし、「自分の意思が環境に影響を与える」という自己効力感を育む取り組みを強化している。</p>
2	<p>SSTを楽しく取り入れている。オーダーメイドの「構造化」と「環境設定」個別療育だからこそ、その子の特性（視覚優位、聴覚過敏など）に完全に特化したSSTが可能である。</p> <p>・視覚スケジュールとの連動：「歌を歌う（5分）」→「挨拶の練習（5分）」→「好きな楽器（5分）」のように、音楽活動をマイルストーンとして提示。見通しを持たせることで不安を軽減し、トレーニングへの集中力を最大化します。</p>	<p>ストップアンドゴー</p> <p>曲を聴く→決まった音で反対周りを何度かして集中力を高める</p> <p>→音楽が止まるとマットの上立つ</p> <p>マットがなかった子で負けたではなくお休みタイムとして待つ練習を行っている。</p>	<p>見通しを持たせるためにロールプレイを先生が行う。</p> <p>勝ち負けではなく、聞く、待つ、動くによって集中力を高め上手にできたことをほめている。</p>
3	<p>職員の連携体制とチームでの支援</p> <p>様々な事例に対しての複数職員での検討共有</p> <p>子どもの気持ちに寄り添った支援</p>	<p>子どもをしっかり観察し、その日その時の感情を汲み取る。</p> <p>子どもの行動には必ず意味があることを常に考えて言葉掛けを行う。</p>	<p>子どもの行動やことばを否定しない。</p> <p>よく話を聞き、子どもが話しやすくなる態度をとる。</p> <p>目線を合わせる、話し出すのを待つ、共感する。</p> <p>まずは、共感することから信頼関係ができる。</p>

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	<p>地域とのさらなる連携にむけて</p>	<p>東大阪市のふれあい祭りに年に一度参加しており、日々の療育の中で近隣の商店街での買い物体験を実施している。</p> <p>施設内活動を優先する中で地域との社会参加の機会はまだ場が限られている状況である</p>	<p>支援の質は維持しながら、地域との繋がりを広げられるよう職員全体で意識して検討していく</p> <p>ゆにこーんぐるーぶのイベントへのお誘いを増やす。</p> <p>お相撲さんイベントやクリスマス会へのご案内等。</p>
2	<p>情報発信・周知の不足</p>	<p>実施している療育内容や行事、防災訓練等の取り組みについて、保護者へ十分に発信できていない部分がある。また、活動のねらいや意図が具体的に伝えられていない場合もあり、ゆにこーんハートとしての取り組みへの理解を深めてもらうための情報発信が必要である</p>	<p>連絡アプリに加えインスタグラムも活用しながら、活動の様子や療育のねらいを分かりやすく発信することで保護者や地域に向けた情報発信の充実を図る</p>
3	<p>活動スペースの環境整備</p>	<p>棚の上など子どもの手が届く位置に物品がおかれている場合があり、危険につながる可能性がある。活動スペースにおいて、物品の配置や収納場所について安全面を考慮した環境整備を定期的に見直す必要がある。個々の遊びに必要なスペースを職員の声かけて作っている。</p>	<p>子どもの安全を確保するため、落下の可能性のあるものは高所に置いていないか、危険につながる可能性のあるものは子どもの手の届かない場所に収納しているか、定期的に見直しを行う。</p> <p>パーティションを作ることで個々の遊びに集中できるようにする。</p>